

先人からの
おくりもの



山梨県峡東地域

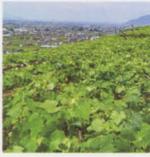
甲府盆地の東部は平坦地から傾斜地まで葡萄畑が広がり、初夏には深碧ふかみどりの絨緞、秋には紅葉の濃淡が日に映え、季節ごとに様々な風景を魅せてくれます。

奈良時代から始まったと伝えられる葡萄栽培は、先人たちの知恵と工夫により、かつて水田や桑畑だった土地を一面の葡萄畑に変え、またその葡萄畑に育まれたワインは日常のお酒として地域に根付きました。今も歴史を語る技術や建物は受け継がれ、葡萄畑の風景の中に溶け込んでいます。



山梨県
山梨市、笛吹市、甲州市

主な構成文化財



葡萄畑

江戸時代に考案された棚栽培を改良し、平地から急斜面まで見渡す限り葡萄畑が広がっています。明治時代までは甲府盆地東部の勝沼地区に限られていましたが、現在では峡東地域の各地に広がっています。

山梨市、笛吹市、甲州市



甲州式棚栽培

竹を使った棚栽培により、江戸時代中期には甲州は日本一の葡萄生産量を誇るようになり、後に甲州式と呼ばれました。また明治31年に丈夫な針金を導入することにより、平地から急斜面まで葡萄を栽培できるようになりました。

山梨市、笛吹市、甲州市



勝沼富町のブドウ(甲州種の原種)

山梨県固有のブドウ品種である甲州種は山梨を代表する甲州ワインの原料となる品種です。勝沼富町にある葡萄の樹は樹齢130年を数え、「甲龍」と名づけられた名木で、この甲龍とそのクローンに実った葡萄からワインを醸造している会社もあります。

甲州市
甲州市指定天然記念物



大善寺

本堂は鎌倉時代に竣工した山梨県内最古の寺院建築で、木造薬師如来像が安置されています。行基が葡萄栽培を伝えたことから、「ぶどう寺」とも呼ばれ、今も寺域で葡萄を栽培しています。

甲州市
国宝(建造物)



木造薬師如来像

奈良時代の名僧行基の夢の中に葡萄を手にした薬師如来が現れ、その姿を像に刻んで大善寺に祀り、行基がこの地域に葡萄栽培を伝えたことと伝説的に語られています。薬師如来は「ぶどう薬師」と呼ばれて親しまれていますが、5年に1度のご開帳の際にはその姿を拝むことができます。

甲州市
国指定重要文化財(彫刻)



清白寺

かつては周囲を水田や桑畑に囲まれていましたが、葡萄畑に転換したことにより葡萄畑の中に仏殿が浮かぶような風景となっています。

山梨市
国宝(建造物)



一宮浅間神社

御祭神の木花開耶姫は酒造の守護神でもあるため、農作業の始まる毎年3月に、県内ワイナリーの約半分に当たる約40社がワインを一升瓶などで奉納しています。

笛吹市



勝沼堰堤

日川下流の土地を水害から守るために大正4~6年に建設された砂防堰堤。岩盤を巧みに利用し、自然の滝のような景観を作り出し、祇園の滝と呼ばれる地域の名所となっています。日本で初めてコンクリートを使用した砂防堰堤としても知られる日川堰堤群の代表的な存在。

甲州市
国登録有形文化財(建造物)



日川治水施設

日川の流路を固定するために明治44年から昭和6年にかけて建設された土砂流出防止の74基の治水施設。現在、下部は土砂に埋まり、上部のみが葡萄畑の中に石畳のように見えています。周囲の土地は水はけのよい土地に変わり、葡萄畑として利用されています。

甲州市



養蚕農家の特徴を持つ和風建築ワイナリー

近代の養蚕農家の特徴を持つ民家で、現在は和風建築ワイナリーとして使われています。
 <原茂ワイン株式会社>
 越屋根をもつ建物で、軒先まで葡萄棚が回り溢らされています。
 <勝沼醸造株式会社>
 2階に棚干を設けた建物で、南側に葡萄畑が広がっています。
 <丸藤葡萄酒工業>
 越屋根をもつ建物で、建物の南側には葡萄畑が広がっています。

甲州市



歴史的ワイナリー

日本のワイン産業の黎明期からワイン醸造を行っている創業100年以上の歴史をもつワイナリーや東京オリンピックを契機とするワイナリー以前に創業した50年以上の歴史をもつワイナリー。最新の設備などでワインづくりを行っています。

山梨市、笛吹市、甲州市



甲州ワイン

日本固有種である「甲州種」の葡萄を原料としたワイン。昭和40年代から「甲州」と品種名を記したワインが作られるようになりました。平成22年OIV(ワインの国際的審査機関)が認証する葡萄品種として「甲州(Koshu)」を登録し、甲州種はワイン醸造用の品種として世界的に認められるようになりました。

山梨市、笛吹市、甲州市

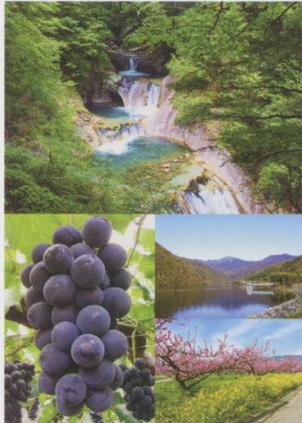
3市の紹介とアクセス



山梨市

源流の恵みが美しい自然景観を育むまち

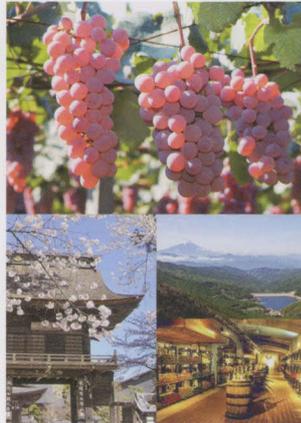
面積の8割を森林が占め、平成の名水百選に選ばれた笛吹川(西沢渓谷)とその支流がもたらす水の恵みを活かし、桃・ぶどうの栽培が盛んに行われ、なだらかな斜面や平地地には美しい果樹景観が織り込まれています。広瀬ダムでは美しい果樹景観を通じて峡東地域に広く提供され、果樹生産の発展に大きく貢献しました。



甲州市

武田家ゆかりの深い歴史とワイナリーのまち

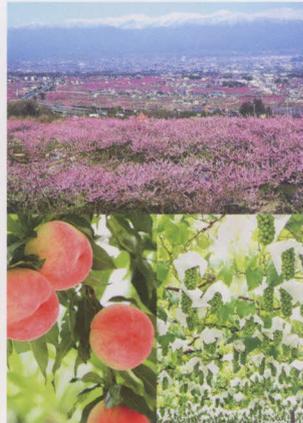
甲府盆地の東部。北東側には秩父多摩甲斐国立公園の大菩薩連嶺をはじめとする秩父山系があります。武田信玄公の菩提寺である恵林寺、勝頼公の菩提寺である景徳院など、武田家ゆかりの神社仏閣が多数存在しているほか、国内のワインの醸造発祥にまつわる産業遺産など近代化産業遺産も数多く点在しています。



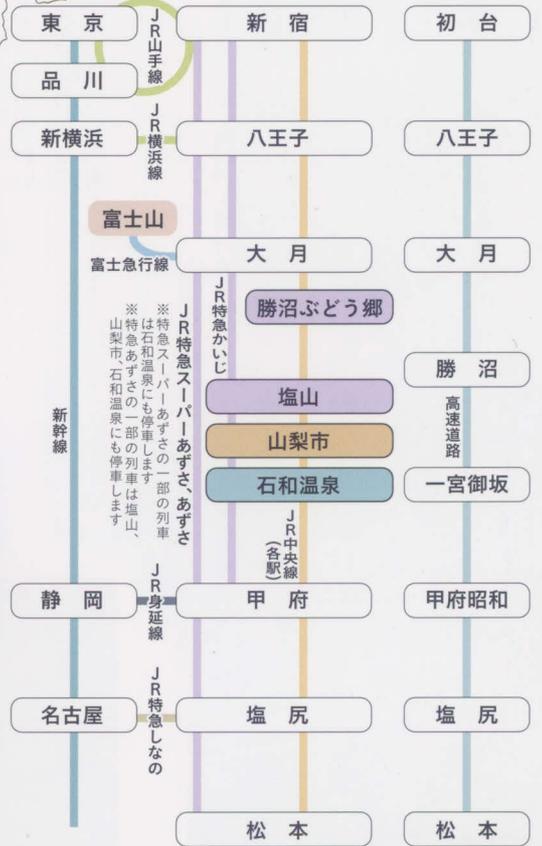
笛吹市

桃源郷・温泉郷としても知られる恵み豊かなまち

縄文時代には華麗な装飾が施された縄文土器を持つ文化が花開き、古代には甲斐国分寺が造られるなど古くから恵み豊かな土地で、山あいの芦川地区には兜造りの古民家が多数残り、日本の原風景とも言える農村景観を形成しています。葡萄栽培とともに桃栽培も盛んで、春には一面に桃の花が咲き、美しい桃源郷の景観が広がります。昭和36年、葡萄畑の中から温泉が湧出し、石和温泉郷として発展しました。



東京から電車・車で約90分



お問い合わせ



峡東地域ワインリゾート推進協議会

〒400-8501 山梨県甲府市丸の内1-6-1
 TEL 055-223-1573 <https://wineresort.jp/>



ぶどうばたけ 葡萄酒畑が織りなす風景

山梨県峡東地域



Story
1 先人の知恵と工夫による葡萄酒畑の形成

甲府盆地東部の勝沼地区は、葡萄栽培が古くから行われ、葡萄にまつわる伝承の地となっています。奈良時代の名僧行基の夢に、葡萄を手にした薬師如来が現れ、その姿を刻んだのが大善寺(ぶどう寺)の薬師如来像であり、この地に葡萄栽培を伝え、これが甲州ワインの原料となる甲州葡萄であると言われています。

江戸時代になると、葡萄は後に甲州式と呼ばれる竹を使った棚で栽培されるようになりました。元々葡萄は乾燥を好む果物であるため、棚による栽培は通風が良く生育に適し、日本における葡萄栽培の原型となりました。

その後、竹に代わり自由に加工できる丈夫な針金が明治中期に導入されたことで、どのような地形にも棚が作れるようになり、屋根状に広がる葉の間から色づく葡萄の房が、シャンデリアのようにぶら下がる光景が傾斜地にまで広がるようになりました。

またこの地区では、東西に流れる日川が度々氾濫し、家や田畑が流されるため、明治末期以降、土砂流出を防ぐための石積みみの治水施設や上流に土砂止めの堰堤などの施設が作られました。

その結果、川の氾濫が抑えられ、日川沿いの田畑は水はけの良い砂地に変わり、葡萄畑への転換が進みました。現在でも、日川沿いの葡萄畑の中には、役目を終えた治水施設が幾筋もの石畳となって残っています。



日川沿いの治水施設と甲州式棚栽培の葡萄



シャンデリアのようにぶら下がる葡萄



大善寺薬師如来像



Story
2 時代の変化とともに拡大した葡萄酒畑

明治期の峡東地域(甲府盆地東部)では、「甲州切妻型」と呼ばれる光を取り入れるために棟の中央を持ち上げた「突上げ屋根」を設けた家屋で、養蚕が盛んに行われていました。

しかし、昭和30年代中頃から化学繊維の普及などにより養蚕業が衰退し始めると、養蚕農家は収益性の高い葡萄などの果樹栽培へと転換し、限られた耕作地で収穫量を増やすために、家屋の軒先まで葡萄棚を張り巡らせました。

こうして葡萄畑は地域の隅々まで拡大していき、農家だけでなく、大善寺や清白寺などの寺社仏閣も葡萄畑の海に浮かぶような、他では観られない風景が形成されてきました。

JR中央本線の下り列車が甲府盆地の東玄関、勝沼ぶどう郷駅にさしかかると、視界が一気に開け、遙か遠く甲府盆地の彼方に青い南アルプスの連なりまで望むことができます。

車窓から見下ろす平地はもろろん、見上げる急斜面まで見渡す限り葡萄畑が広がっており、春から夏には若葉から青葉へ、秋から冬には紅葉の濃淡が陽に映え、ぶどう郷の四季は、色彩の変化とともに移りゆき、繊細かつ鮮やかに、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

また、勝沼地区には、収穫した葡萄を一時保存する半地下の貯蔵庫の遺構があります。これにより、出荷量の調整が可能となり、市場への安定供給と価格の安定が図られ、葡萄の生産拡大に繋がっていました。

この貯蔵庫は、電気冷蔵庫が普及する昭和30年代まで使われました。

昭和33年に国道20号新笹子トンネルが開通したことにより流通環境が飛躍的に改善し、京浜市場と直結されたことから、葡萄栽培は一層盛んになりました。またモニターゼーションの進展とともに、首都圏からの観光客が急増したため、主要な道路沿いには観光葡萄園が増加し、今でも収穫の時期には、葡萄狩りを楽しむ観光客で大いに賑わいます。



甲州切妻型家屋



葡萄畑に浮かぶような寺社仏閣



半地下式のワイン貯蔵庫

明治時代になり、ワインづくりが政府の殖産興業政策の一環になると、葡萄栽培が盛んな山梨県では明治9年に甲府城跡に県営の勸業試験場が開設され、全国に先駆けて葡萄酒醸造所が開かれました。

また明治初期、勝沼にあった日本初の民営のワイン醸造会社二人の青年をフランスへ派遣し、本格的なワイン醸造に取り組みました。そして、試行錯誤を繰り返しながら、ワインの醸造と普及に情熱を注ぎ続けた人々によって、この地域では「葡萄酒」文化が形成され、定着していきます。

明治中期には、勝沼の生産農家が葡萄価格の安定に取り組みようと組合を組織し、ワイン醸造に乗り出しました。組合員の間で冠婚葬祭はもちろん日常もワインを飲む葡萄酒愛飲運動が始まり、ワインは農家にとって生活に密着し、身近な飲み物となりました。

山梨県ゆかりの作家太宰治が甲府に逗留した際のことを書いた小説『新樹の言葉』では「押入れから甲州産の白葡萄酒の一升瓶を取り出し、茶呑茶碗で、がぶがぶのんで、酔つて来たので蒲団ひいて寝てしまった。」とあり、地域にワインが浸透し、飾らない楽しみ方で飲まれる様子がよく描かれています。

このように農家を中心となつて始めた葡萄酒を造り楽

しむ習慣は、やがて組織化され、本格的なワイン醸造につながり、現在、峡東地域は60を超える日本一のワイナリー集積地に発展しました。

西欧の古城風の建物から養蚕農家を改築した家屋まで、ワイナリーの形態は様々であるように、同じ地域の甲州葡萄で造った甲州ワインであっても、風味や香りはワイナリーごとに異なっています。

この地域のワイン文化は神事にまで及び、笛吹市の一宮浅間神社では祭神の木花開耶姫命が酒造の神であることから、昭和40年頃からワインが奉納されており、県内ワイナリーの約半数に当たる40社ほどが、農作業が始まる3月半ばにワインを一升瓶などで奉納し、参拝者へワインの御神酒が振る舞われます。また今では葡萄の豊作と良質なワイン醸造を祈願してコルク栓を供養する地域のお祭りも併せて行われています。

このように、葡萄とワインとの地域の関わりは多岐にわたり、特に長い栽培の歴史を持ち、美しい葡萄畑の景観の中心をなす甲州葡萄から造られる甲州ワインは、鉄分が少なく魚料理の生臭さを増幅しないため、近年の世界的な和食ブームを背景に、寿司や刺身など生魚の味わいを楽しむ和食との相性が良いワインとして、欧米などで評価が高まっています。

葡萄畑が広がる峡東地域の風景は、1000年を超える年月を掛けて作り上げられてきたものです。

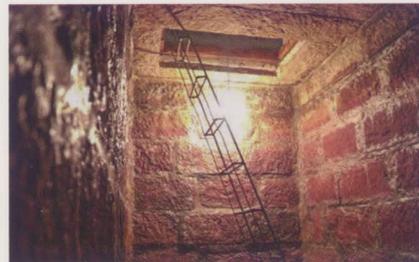
地域を訪れる人々が四季折々の景観、街並みに触れて心を躍らせるのは、この地域が積み重ねてきた葡萄栽培の歴史や、先人達の努力、互いに切磋琢磨し、高品質なワイン醸造

に挑戦し続けるワイナリーの姿など、地域の特性が大きく影響しています。

季節の移ろいとともに変化する葡萄畑の風景の中には、今も受け継がれる技術や建物、日常生活の中に溶け込んだワインがあり、それらに触れることで山梨県峡東地域の魅力を誰もが感じることが出来ます。



ワインの御神酒



明治期のワイン地下発酵槽



身近な一升瓶ワインは、湯呑みで気軽に飲まれていた



軒先まで張り巡らせた葡萄棚



和風建築のワイナリー